月華麗君後宮譚
～偽りの宦官と秘された皇子の事件帳～

葵一樹　Kazuki Aoi

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

第一章　朝、宦官は帝姫に迫られる

「待てこら！　俺はやるって言ってねぇぞっ！」

今上皇帝の後宮奥深くにある承寧宮。

大弦国皇帝の寵愛を一身に受けていた美貌の妃――瑛賢妃が亡き後、その宮には一人の帝姫が住んでいた。

齢十五の姫君は大層病弱で、枕から頭が上がる日が月のうち幾日もないという。同じく体が弱かったとされる賢妃が亡くなってからというもの、古参の侍女頭をはじめとするたった三人の侍女と、一人の護衛宦官、そして小間使いの宦官が姫君に仕えるのみだった。

妃がいない故に、承寧宮は他の妃嬪からほとんど見向きもされない。姫君を診察する後宮の侍医と、父である皇帝が時折足を運ぶ以外に、訪れる客もなくなって久しい。

そんなひっそりとした宮の一番奥の部屋、姫君の寝室に当たるその部屋では、早朝から一組の男女がもみ合っていた。

一人は小間使いの宦官。

もう一人はこの宮の主である帝姫。

姫君と宦官の道ならぬ恋――ではない。

当代一の病弱と言われている姫君は、あろうことか絹の下着姿で、寝台の上に逃げた半泣きの宦官を追い詰めていた。

「く、来るな銀月！　ちょっと待て、お前、勝手に脱がそうとするんじゃねえ！」

「往生際が悪くてよ、白狼。大人しくなさいな。お前の気が進まぬのであれば、わたくし手ずから一枚ずつ脱がせて差し上げると言っているのに」

「猫なで声やめろ！」

「お前な、優しく言ってやっているうちに着替えろ。早くしないと侍医が来る。支度が間に合わんぞ」

この騒ぎを聞きつけた者は、おやと訝しく思うだろう。

銀月と呼ばれた姫君の口から飛び出す声は、変声期に差しかかった少年のそれだった。やや低くなりたてのかすれ声は、その背に美しく波打つ髪と花のように可憐な顔立ちとはなんとも不釣り合いである。

「うっせえ！　今までだったらお前がやってたんだろ？　だったらそれでいいじゃねえか！」

対する白狼と呼ばれた宦官は随分と小柄であった。寝台に膝をかけてにじり寄る姫君を遠ざけようと、闇雲に振りまわす手足も男のものにしては細く、小さい。そして宦官の特性というものを差し引いたとしても、声が子どものように高かった。

「やかましい。定期健診の侍医だけならさして問題ではないが、何故かご機嫌伺いと称して皇后の女官がついてくるなんて先触れがあった。皇后の意見といって診察ついでに服を脱がされる可能性もある。女の体が必要だ」

「だったら黒花さんにやってもらえばいいだろう！」

「体格はともかく黒花じゃ年齢が違いすぎる。四の五の言わずにさっさと脱げ。そしてこれを着ろ」

上下ともに丈の短い絹の下着姿になった銀月がにじり寄り、白狼にぐいっと女物の

薄い着物と裳を突き出す。白狼は着ている宦官服の胸元をぎゅっと握りしめ、断固拒否の構えを取った。

が、それも一瞬のこと。

銀月の背後に控えていた翠明、黒花、小葉という三人の侍女にあっという間に白狼は取り押さえられてしまった。

「うわあああ！」

「いい加減に観念なさい、白狼。この宮に来る際、なんでもやると申したではないですか。姫様ではないですが、往生際が悪いにもほどがあります。黒花、小葉、さっさと脱がしておしまい！」

「なんでもやるとは言ったけど、女の恰好は絶対しねえとも言ったじゃねえか！」

「何を言っているのです。普段は宦官の服を着ていて良いというのは姫様の温情ですよ」

「とにかくやだっつってんだろ！」

「人の耳元で叫ばない！」

初老に差しかかっているとはいえ、長年この宮で侍女頭をやっているという翠明は、

驚くほど素早い動きで白狼の頭に拳骨を落とした。

瞬間、白狼の目の前に星がちらつく。やせぎすの女性の拳だというのに、とんでもない威力だ。

礼儀作法を重んじ、帝姫たる銀月に貴婦人としての教育を施した人とは思えないほどの力に、さしもの白狼も黙らざるを得ない。

白狼を一喝した翠明は、ほかの二人が作業を始めるのを見届けるとくるりと銀月を振り返った。

「姫様も、いったんそちらの衣はお預かりしますのでご退室なさってお召し替えを」

「しかし、白狼が逃げてしまわんように人手があるに越したことはなかろう」

「何をおっしゃっているのです。殿方が女人の着替えを見るなんてもってのほかですよ」

「私は構わんが。どうせ白狼だし」

「構わんが、ではございません！　いくら白狼とて中身は女子。日頃から姫様とお呼びしておりますが、あなた様は殿方。しかも御歳十五になられたこの国の皇帝の御子でございます。弁えなさいませ！」

今度は銀月に翠明の雷が落ちた。

しまった、と銀月の表情が気まずいものに変わる。つい先ほどまで寝台で白狼と取っ組み合って服を脱がそうとしていたことを思い出したのだろう。

既に二人の侍女に半分がた脱がされている白狼は、黒花に羽交い絞めにされたまま小さな体を一層縮めた。年端もいかない童のように小柄とはいえ、実際の歳は十九を数える白狼の胸元には分厚くさらし布が巻かれている。その布にわずかな膨らみは押しつぶされ、細い谷間ができていた。

「周！　周は控えていますか？　早く姫様のお召し替えを！」

翠明が戸口に向かって声をかければ、外に控えている大柄な宦官が「はっ」と応じた。

武官らしく太刀を佩いたこちらは、宦官といえどさすがにうら若い娘が衣服を剥かれている室内には入らず、扉の前で銀月を促す。

ばつの悪い顔をしたままの銀月が周に連れられ出ていくと、黒花と小葉は白狼の着替えを加速させた。その手は無慈悲にも白狼が着ていた官服や袴を剥ぎ取り、丈の短い麻の下着から伸びる手足や胸元に白粉を叩いていく。

「や、やめろって！　絶対バレるから！」

「大丈夫大丈夫。姫様はいつも顔色が悪いのを隠すためって言って白粉の厚塗りをしてるし、化粧も濃いめにするから」

「あら白狼ったら顔は日焼けしてるけど、体はそうでもないわね。うなじはもう少し白粉塗っとく？」

「あらほんと。ああ、服がだぶだぶに余っていて手足が外に出ないせいかしら。それにしてもちょっとあんた、このさらし、強く巻きすぎよ。痕がついてるわ」

「うっせ！　勝手に取るな！」

「あ、ちょっと白狼！　どさくさに紛れて人の帯飾り盗まないでよ！　ほんとあんたって手癖が悪いわね」

「精神的な慰謝料だ！　女装はやだってば！」

ほとんど裸にひん剥かれながらも、白狼は化粧を拒もうと抵抗を試みた。

しかし三人の有能な侍女たちに囲まれては、一般的な女性より小柄な白狼では太刀打ちができない。荒事は不得手ではないが、かといって女性を殴るのは気が引けた。

高まっていくどうしようもない憤りは、得意のスリの技で侍女たちの宝飾品を抜

くことで発散するしかないではないかと開き直る。

こんなところ来なければ良かった、と心の奥底から後悔の念が湧いてくるがもう遅い。もしもその後悔に従って逃げだしたら、重大な秘密を知っている自分が一生お尋ね者にされるのは間違いなかった。捕えられれば間違いなく斬首である。

それだけではない。あいつ――銀月が困る。状況次第ではあるが、悪くすると逃げ出した白狼のせいで銀月も殺される。それはなんとなく後味が悪いし、嫌だった。

目尻に紅を入れられている間、薄目を開けていた白狼は前かがみになっている黒花の帯紐の先についている玉をこっそり抜いた。本日、二個目の戦利品だ。

こんなところにいては換金するあてもないが、女装の憂さ晴らしと将来のちょっとした小遣い代わりだ。これほどの無茶を強いられているのだから、彼女たちの飾り物の一つくらい貰ったってばちは当たらない、はずである。

いつか絶対銭に替えてやる、と固く決意するが、それが一体いつになることか見当もつかないところがつらい。

しかしなんの因果か、性別を偽った皇子が後宮で息を潜めているなんて。この秘密は、宮にいる側近達と後宮の主人でありこの国の主人でもある皇帝しか知らないと

いう。

そんな重大な秘密をうっかり知ってしまった自分が心底恨めしかった。

白狼が激しく後悔に苛まれている最中も、侍女たちの作業は続けられていた。

いつの間にか女物の上等で豪華な絹の着物を重ねられ、長い髪の鬘を頭に括り付けられている。鬘は紐や簪であちこち縛られ突き刺され固定されているため、土台に使われた地毛が尋常ではない力で引っ張られ、頭皮がずきずき、ぎりぎりと痛い。

痛みによって自然と白狼の眉は下がり、伏目がちになった。それを確認した翠明は、よろしいと言って白狼を姫君用の椅子に座らせたのだった。

そして今に至る。

まもなくやってきた侍医の診察を、銀月の格好をさせられた白狼は受けていた。

とはいえこの国において高貴極まりない身分である帝姫の身体においそれと触れることはできないため、ほぼ問診だ。それでも繰り返される同じような問いに辟易しながら、白狼はひたすら頭痛に耐えていた。

鬘を固定したときから続く痛みが徐々に重苦しい鈍痛に変化しているのだ。痛む

ところも頭から首、肩に変わっている。

「……はぁ」

目の前にいる白衣の年寄りはぼけてるんじゃないだろうか。いつ終わるともしれない繰り返しの問診に、白狼は顔のほとんどを隠した扇の裏で声にならないため息を吐く。すると手元の帳面に何事かを書き入れていた侍医の筆が止まった。

「い、いかがされました姫様。お疲れでしょうか？　お加減がよろしくないようでしたら、薬湯を煎じて出直してまいりましょうか」

心配そうな申し出に、白狼は扇の陰から部屋の入口に控えている銀月を見た。

白狼が着ていた宦官（かんがん）の服を着て頭（こうべ）を垂れているが、話は聞こえていたのだろう。こちらに目配せをして、首を小さく横に振っている。

まあそうだよな、と白狼が断るために口を開こうとすると、それを遮るように翠明が「不要です」と侍医に告げた。まるで白狼が直答（じきとう）しそうになったことを察していたかのような素早さだった。ついでに後ろに立つ小葉につんと背中をつつかれ、白狼はあぶないあぶないと肩を竦めた。

いかに私的な宮の中で侍医相手とはいえ、高貴な姫君が男を相手に直接口を利くこ

となどありえないのである。

それからしばらくの後、ようやく問診を終えると、侍医は頭を下げて退室していった。薬を後程取りに来るようにということなので、おそらく着替えた白狼があとでお使いに行くことになるのだろう。全くひと使いが荒い。

侍医が退室すると、黒花と小葉に立て続けに小突かれた。ため息をつきすぎ、姿勢が悪い、気品が足りない、うっかり口を利きそうになるな、などなど。無理やり身代わりに仕立て上げたくせにひどい言いようである。

しかも結局、皇后の女官なんて来なかった。意に沿わない女装をし、痛みに耐えた自分を褒めてくれる者はいないのか。

侍女たちのぞんざいな扱いにふくれていると、周と戻ってきた銀月がするすると白狼に近づいてきた。

こいつだけは褒めてくれるか。

期待する白狼に、銀月はそっけなく言い放った。

「お前、扇を持つ手を袖から出しすぎだ。私はもっと手指を隠して、上品にそれを支えるのだ、この粗忽者め」

「なっ！　お前、無事乗り切った、よくやったくらい言えねえのかよ！」
「ギリギリだ。バレたら私もお前も、宮のみんなも、その一族全員の首が飛ぶぞ。もっと精進しろ」
しれっと物騒なことを言った銀月は着替えのために踵（きびす）を返す。その後姿に白狼はべえっと舌を出した。しかしちょっとした動きで簪がずれ、引っ張られた地毛の部分に鋭い痛みが走る。ぐうっと白狼は奥歯を噛んだ。これだから女装なんて慣れないことをするもんじゃない。

――あのとき、なんでもやるなんて言わなきゃよかった。

男として生きてきた自分には到底納得しきれない状況ではある。しかし実際のところ銀月達の言い分も分かるし、やらなきゃならない事情も理解できる。
そう頭では分かっていても、心の反発は抑えられない。
なんだってこんなことに、と泣きたい気持ちになった白狼は、泣く代わりに大きなため息を吐いたのだった。

第二章　河西（かせい）の白狼

出会いは唐突だった。
そして出会ったその夜のうちに、二人はお互いの秘め事を共有した。
寝台の上で胸倉を掴みあった二人の手が止まったのはほぼ同時。
離宮とはいえそこらの食堂より広い姫君の寝室。寝台に添えられたたった一つしかない燭台のわずかな灯りの中、はだけた夜着からのぞく胸元をお互いが凝視する。
片や白くなだらかな、うっすらと筋肉が乗った胸。
片や硬い麻の布で巻かれ、わずかな膨らみを押しつぶした胸。
胸元を凝視していた二人の視線が、ゆっくりと交差する。

そして、二人の口が同時に開いた――

★

「おい坊主、今日の芋餡は会心の出来だぜ？　美味えだろ？」
「俺ぁもうちょっと甘くねえほうが好みだな。ちょっと糖蜜入れすぎじゃねえの？」
「小僧が生意気言うんじゃねえよ。帰って母ちゃんの乳でも吸ってやがれ！」
「なんだよ、不味いとは言ってねえだろ」

河西に来た時の馴染みにしている甘味屋の店主にしっしと手で追い払われながら、白狼は行商が集う朝市で芋団子を齧るふりをして行き交う客を物色していた。

大陸の北から南西へ流れる濃河は、海の近くから内陸部を繋ぐ物流の要所であった。その濃河の西側を流れる支流沿いにある河西は、海の物も山の物も扱う行商がよく立ち寄る街だ。

毎朝開かれる朝市には活気があふれ、近隣に住む民や商人が入れ替わり立ち代わり訪れる。

その隅に店を構える甘味屋にもそれなりに人気があるらしい。白狼以外にも若い母親風の女やそれについてくる子どもが、団子をひと串、せんべいをひと袋、などと買っていく。

「そういやおっさん、今朝は娘を見ねえがどうした？　留守番か？」

客が途切れた隙に世間話の一環で白狼が店主に問えば、陽気な笑い声とともに嫁に行ったと聞かされた。

「ついこないだ、いいとこの坊ちゃんが見初めてくれてなぁ」
「いいとこの坊ちゃんのとこって、そりゃ嫁入り道具と持参金の支度がかかっただろ？」
「そこそこな。いっときは痛え出費だが、あの大店と縁続きになりゃ、うちの店も金が借りやすくなるってもんさ。うちの娘狙ってやがったのか？　小僧、十年早えぞ？」
「抜かせ、あばたヅラの女にゃ興味ねえよ！」
「んだとこのガキ！　買わねえならとっととどっか行っちまえ！」

店主が拳を振り上げた瞬間、それをかいくぐって白狼は店先から離れた。

場末の甘味屋だが、その娘がいいとこの坊ちゃんに見初められたとは景気がいい。

景気がいい話ではあるが、胸糞悪い。
娘を嫁に出した見返りが楽しみだという内心が明け透けに見えすぎて、白狼は店主を振り返って舌打ちをした。
小柄なせいで坊主や小僧などと呼ばれることが多いが、既に白狼は数えで十九だった。どんぐりのような大きな目をした童顔も、ひとまわり大きな着物のだぶついた袖も、周りに対して年齢を低く見せるのに一役買っている。ただし、もちろん白狼はそんな見た目通りの「子ども」ではない。
鋭い視線であたりを窺う白狼は、帝都などにいれば警邏（けいら）に声くらいはかけられたかもしれない。その程度には「柄が悪い」のである。
しかしここ、河西は帝都からも離れておりのんびりとした田舎町の風情を残したところだ。白狼の柄の悪さを気にする兵もほとんど配備されていないのは、白狼の生業（なりわい）にとって幸運だった。
「おっと……」
口内に広がる芋餡の甘さに閉口しつつ、人波を避ける。やけに朝市の客が多いなと辺りを見渡せば、街のはずれに建つ大きな赤い瓦屋根の屋敷が目に入った。

――そういやこないだからお姫様が来てるって噂だっけ。
行商達が話していた噂話を思い出して、白狼はまた団子を齧（かじ）った。
この河西の街には何代か前の皇帝が建てた離宮がある。夏を前に皇帝の娘がその離宮へ避暑に来ているらしい。体の弱いお姫様で毎年夏の暑さで体調を崩すらしく、今年は初夏の足音も聞こえぬうちに療養のため移動してきたという。
確かにこの辺は帝都に比べれば北にあるので夏でも涼しいが、その反面暖かくなるのも遅く、秋になると水辺の街ゆえにすぐ冷え込む。しかも標高の関係か夏でも朝晩の気温差がかなりある。
夏前から秋口まで滞在するとして、ひと月半、あるいはふた月ほどで帝都と河西を往復するとなると、病弱な姫君にはかえって酷ではないだろうか。
まあ、そんなことは白狼の知ったことではないが。
お姫様の一団が来た時は、それはそれは華やかな行列だったと聞いたが、生憎その時白狼は港に近いもうちょっと大きな街へ出稼ぎに行っていたので見ていなかった。
大きな街は人出が多く、街を一巡するだけでかなりの稼ぎになった。芋団子の数串を気兼ねなく買えるくらいに今の白狼の財布は重い。自分ひとりであればしばらく食

うには困らない十分な稼ぎだ。
そんな額をどうやって稼いだかといえば答えは簡単。
大きな声では言えないが、白狼の生業は人様の財布をちょいと「拝借」すること——つまりスリ稼業だ。街が大きければそれだけ金を持っている人間も増え、白狼の稼ぎも増えるという話だ。
ちなみに今白狼が着ている故服はその時の稼ぎを使い、港町の市場で買ったものだった。一般的な庶民に偽装することができ、街角に佇んでいても目立ちもしなければ胡散臭がられもしない。
いい買い物をした、と白狼は大満足していた。
さて、お姫様効果かどうかはともかく、のんびりしている河西の街であっても人通りが増えれば増えた分だけ店は繁盛する。市に店を広げる行商達も各々商売に勤しみ、客引きの声が大きく響いていた。
客引きに応じて売り物を手に取る者、目的の店までわき目もふらず歩く者、冷やかしなのか店ごとに足を止めて覗き込む者など、客側も様々だ。いずれにせよ賑わっている市にわざわざ足を運ぶくらいだ。どの客も、行商も、懐は大層温いに違いない。

ということは、と自然に白狼の頬が緩んだ。
今日は白狼にとっても稼ぎ時であるらしい。
であれば、早めに「商売相手」の目星をつけてさっさと仕事に取り掛かろう。
白狼は残りの団子を手早く口に放り込み、冷やかし客のふりをして人混みに紛れ込んだ。
薬草売り、肉売り、野菜売り、布売りなど行商の露店が隙間なく立ち並ぶ大通りは、文字通り人でごった返していた。行商人は仕入れと売却が済めばまた別の街へと移動していくものだが、先月もいた商人がまだ店を畳んでいない。ざっと見ただけでもそんなのが何人かいるようだ。
お姫様効果ってやつかね、と白狼は露店を覗きながら油断なく辺りを観察し続けた。下手な商売相手を掴めば稼ぎは少ないし、かと言ってあまりにも上等な商売相手となれば、警戒も上等で捕まる可能性も跳ね上がる。程良く銭を持っていて、ちょっとトロくさそうで、と客を吟味する。
なるべく人に顔を晒さないように立ち回りながら、念入りに商売相手を探していた白狼の視線がぴたりと止まった。

その視線の先にいたのは、ややみすぼらしい身なりをした二人組の中年男だった。継ぎをあてられた着物を着ているものの、当人たちの血色は悪くなく腹などはむしろ出っ張っている。いや、でっぷりとだらしなく突き出しているといったほうがいいか。髪に巻かれた布も、薄汚れているように見えるが生地自体は上物のようだ。

市場の活気に誘われて出てきたどこぞの有閑(ゆうかん)お貴族様やその従者あたりだろう。庶民を装ってはいるが、周囲の人間と比べたら二人の出立ちは浮いて見える。しかし本人たちはお忍びで街の風景に馴染んでいるつもりらしく、見たかぎり、護衛がついている様子もない。

いい商売相手を見つけた、と白狼は舌なめずりをしながら二人をさらに観察した。

二人組は食材を買おうとしているのか、肉売りと野菜売りの店の前で額を寄せ合って何事か相談しながら店主にあれこれ言いつけている。店側は揉み手でそれに応じ、いくつかの野菜の束と干し肉、締めた鶏などを布にくるみ始めた。品物を受け取ると、二人組の一人がそれを持ち、もう一人が銭を払う。

なるほど財布係はそっちか、とアタリをつけた白狼は二人組の背後にそっと近づいた。

「おい江淳(こうじゅん)。次はもっと値切らんか」

「陳該(ちんがい)殿、そうはおっしゃいますがお嬢様にお出しするお食事ですし、材料はそれなりのものをご用意せねばなりますまい」

「どうせたいして食わんのだ。金がもったいない。お主が土地の者に顔が利くというから、わざわざ直々に買い物にきたというのに」

「いやいや、顔が利くとは申しておりませんよ。見知った行商がこの時期に河西に寄るというだけで……」

両手に食材を抱える男に、財布を出した男はぶちぶちと文句をつけていた。男の割にやけにキンキンと耳に響く高い声だ。どうやら財布係の立場のほうがやや上のようだが、随分とケチくさいことを言っている。

半端な金持ちはこれだから、と白狼は思わず鼻を鳴らした。しかしこの分なら仕事をしても気に病む必要はなさそうだ。

「それにしても河西は西方からの薬草や香辛料も豊富に手に入るので、腕が鳴りますなぁ」

「そうだな。お主が先ほど買った八角(はっかく)とかいう香辛料も大きく、しかも良い香りで

あった。今夜の夕餉(ゆうげ)には使うのか？」
「香りが飛ばぬように小分けにしてもらいましたからな。早速今夜の羹(あつもの)に使うつもりですよ」
「それは良い。てい……お嬢様はともかく、随伴している上役達は舌も肥えているだろうし、きっとお喜びくださるだろうて……おっと」
辺りを気にすることなく会話を続ける財布役に、白狼はすれ違いざま肩をぶつけた。よろけた男は尻餅をつくほどではなかったが、大きく体勢を揺らす。咄嗟(とっさ)を装ってそれを抱き止めた白狼の右手が、彼の懐から色鮮やかな糸で織られた財布を抜きとった。
時間にすればほんの瞬き一回にも満たない。この人混みの中で気付いた者は、抜かれた男をはじめ誰もいなかった。
「小僧！　どこを見ている！」
「す、すいやせん。ちょっと、腹が痛くて……」
「怪我でもしたらどうしてくれるんだ、この無礼者め！」
「すいやせん、でもその、厠(かわや)に行きたくて……」
もちろん大嘘である。何度もペコペコと頭を下げていると、まあまあと隣の男がとりなした。

「陳殿もどうかお気を鎮めてくだされ。この人混みです。ぶつかってしまったとて仕方ない。倒れず、怪我もされずに済んだと思えば良いではないですか」
「へえ、大変すいやせん、すいやせん」
両手に食材を抱えた男に諭された財布役は忌々しげに白狼を睨む。しかしそれ以上追及されることはなく、しっしと手で追い払われた。白狼は促されるまま数歩後退り、二人組に深々と頭を下げる。
わずかに膨らんだ袖の重みは、抜き取った財布にそこそこの銭が入っている事を知らせてくれる。それを考えたら可哀想な商売相手に頭を下げることなどどうということはない。こんなのはどうせタダだ。
殊勝(しゅしょう)な態度とは裏腹に、心の中で毎度ありと白狼がほくそ笑んでいることなど誰が知ろうか。
――今日は定食屋で美味いものでも食ってやろう。
白狼の頭に浮かんだのは、卵をふんだんに使った鶏粥である。
河西は行商人がよく訪れる街であることから飯を出す店も多い。街でも美味いと評

判の定食屋は、宿なしの白狼が気軽に食いに行くには少々敷居が高い店だった。しかしこうやっていい商売相手で仕事に成功した日には、たまの贅沢として利用するのだ。

自然と軽くなる足取りで、白狼は目当ての定食屋へと向かった。

昼前の定食屋は朝市にやってきた買い物客が遅い朝餉をとっているようで、二十ほどある席に空きがないくらい繁盛していた。くるくるとよく働く女給に方々の卓から注文の声が飛び、奥の厨房からはそれに応じる若衆のがなり声が聞こえる。

店先でしばらく待っていると、数人の出ていく客と入れ替わりに白狼が席に通される。卓についた白狼は案内してくれた女給に鶏粥をひとつ注文し、ほくほくしながら袖の中で財布の紐を解いた。

「さあて、期待してるぜぇ……」

上等でござい、と言わんばかりの立派な織物の財布をそのまま広げては目立ってしまう。白狼はそのまま袖の中で財布の中を改めた。

期待通りであるならば、指先にたっぷりの貨幣の感触が伝わるはず、だった。

しかしだ。そこにあったのは予想外の感触である。最初に触れたのは薄い紙だった。何かが包まれているらしい。白狼は指先だけでそれを解く。すると次に触れたのはち

くりとした鋭い何かだった。断じて金属や貨幣の感触ではない。

かさかさ、ちくちくとした手触りに、白狼は慌てて袖の中を覗き込んだ。鼻先にふわっと乾いた薬のようなそれでいてどこか甘味を含む香ばしいにおいがまとわりつく。

「……は？　なんだ、これ」

鼻をつまんだ白狼が袖の中から財布の中身だけを卓に取りだすと、それは乾燥した変わった形の草の実だった。花のような形だが平たく八方に棘がついている。においの元はこれらしい。数は五個。

「はあ？」

白狼は焦ってさらに袖の中で財布をひっくり返した。もう一つ薄紙の包みがある。まさかこれも草の実なのか。薄紙越しに触れると、やはりというかなんというか、ちくりとしたものが指先を刺した。

「っつ……」

棘の感触に指が跳ねる。すると袖の中で財布が大きく開いたらしく、ちゃりんちゃりんと数枚の銅銭が床に転がり出てきてしまった。

子どもが小遣いを落としたと思われたのか、近くに座っていた男が拾い集めてくれ

たそれはたった十五枚。もう袖の中からは出てこない。つまり、今回の稼ぎは薄紙に包まれた草の実と銅銭十五枚だけということだ。

これでついさっき注文した鶏粥を食ったら今夜の宿代に足が出る。

白狼は唇を尖らせて草の実を摘まみ上げた。

「……派手なもん持ってるクセにシケてやがる。なんだよこれ。紛らわしいんだよ……」

とはいえ財布の生地自体は上等な織物だ。

どこかで売っ払うか、と小間物屋への道順を思い浮かべていると、白狼の目の前にどすんと碗が置かれた。立ち上るふくよかな湯気の向こうに、見知った店主の顔が覗く。

生やし始めた髭は癖が強く上手く束になっていない。この店の若店主だ。

「鶏粥お待ちどう！」

ほんの一年前に代替わりした若店主は威勢の良さとざっくばらんな人柄で一流とは言えないが美味い料理を作る奴だ。たまにしか来ない白狼についても、小遣いを貯めて食べにくるんだろうと勝手に解釈しているらしくおまけしてくれることもある。

つい最近父親になったばかりという彼とは、いつもであればちょいと世間話でもと思うが生憎今日はそんな気分ではない。

白狼は無愛想に片手で代金を放った。

「おいおい、どうしたよ白狼。機嫌悪いじゃねえか」

「うっせ」

「なんだなんだ。おめえ腹減ってんのか？　親にでも叱られたか？　それとも女に振られたか？　とりあえず食えよ。腹がくちくなりゃ大概のことはどうでもよくなるもんだぜ……ん？」

普段であれば軽口で返せる若店主の冗談も、今の白狼にとってはうざったいだけだ。

あっちに行けと手で追い払おうとしたが、若店主の視線が卓に注がれていることに気がついた。

「……あんだよ」

「いや、なんだよってお前。そりゃこっちの台詞だよ。それ、八角じゃねえか。白狼、お前それどうしたんだよ」

若店主が意外そうな顔をしながら指さしたのは、白狼が先ほど卓の上に広げた奇妙

な形をした草の実だ。店主の声が弾んでいるように聞こえるのは気のせいか。
白狼は咄嗟に草の実を手で覆った。変な草の実とはいえ珍しいものなら足がつくかもしれない。こんなチンケな仕事で捕まっては馬鹿みたいだ。
「どうしたんだよって、ちょっとな。知り合いにもらったんだよ」
嘘くさいか、と思ったが、若店主はそこには気がつかなかったらしい。白狼の細い指の隙間からひょいと草の実を摘まみ出し、止める間もなく矯めつ眇めつし始めた。
「なんだよ、あんたこれが何か知ってんのか？」
仕方なく白狼が残りの草の実も見せると、ほうと若店主の鼻の穴が膨らんだ。
「馬鹿にすんな。これでも料理人の端くれだぜ。こいつはな、八角っていってここよりちょっと南の方で取れる香辛料さ。うちの料理でもちょいちょい使ってる。こりゃ棘も鋭いし香りもいい。上等な八角だな」
「へえ」
「なんだ、知らなかったのか？」
ちょっと自慢げな口調にお前は物知らずだと言われているようで面白くない。白狼はつんと唇を尖らせる。

「知るかよ。俺、料理しねえもん」
「じゃあなんだってそんなもん貰ってんだよ」
「おまけだよ、おまけ！　仕事の駄賃みたいなもん、あんたもたまにくれるだろ！」
「餓鬼の駄賃でこんな上物寄越すなんざ、随分と羽振りがいいんだな」
「俺は銭が良かったけどな」
香辛料など、宿なしで日々の食事は屋台がせいぜいという白狼が持っていても仕方がない。大損だと内心で財布役の男に悪態をついていると、若店主がそっと白狼に顔を寄せた。
「なんだったら俺が買い取ってやろうか？」
にやりと白狼の口角が上がった。これは思いもよらない申し出だ。ただの草の実が銭になるかもしれない。
「いくら出す？」
逸る心を漏らすまいと白狼の声も自然と小さくなる。別に悪いことをするわけではないはずなのだが、二人は額を寄せ合って密やかに商談に入った。
「お前、いくらなら売る？」

「一個あたり銅銭五枚」
「おいおい、駄賃がわりの八角一個にそりゃあぼったくりってもんだぜ」
「棘も鋭くて香りもいい上物なんだろ？　嫌なら外の野菜売りにでも売っ払うぜ？」
「んー、じゃあここにある五個全部買うからよ、銅銭十枚でどうよ」
「ケチくせえな」
「ついでに今の鶏粥、タダにしてやるよ」
お、と白狼の目が輝いた。注文した卵付き鶏粥は銅銭四枚。拾ったような草の実五個が実質銅銭十四枚になる計算だ。悪くない。
「よっしゃ、売った。ほらよ、持ってけ」
「へへっ、商談成立だな。貰ってくぜ」
若店主は前掛けにぶら下げた袋から銅銭十枚を卓に出す。引き換えに「八角」とかいう草の実を五個摘まみ上げ、鼻先に近づけて匂いを嗅いだ。
その満足そうな表情に、白狼も自分の指についているだろう八角の匂いを確かめてみるが、薬臭いだけであまり好きな匂いではなかった。
こんなもんを料理に入れて美味くなるもんかね、と疑問も浮かぶ。

しかし店主は満更でもない顔をして一人頷き、へへへと肩を揺らして白狼に意味深な笑みを投げて寄越した。
「いやあ、安い買い物しちまって悪いな」
「なんだと？」
「八角はなー、料理以外にも風邪ひいたときやらの生薬に使われるんだぜー。あと母親の乳の出を良くするなんて話もあったから、うちのカミさんも助かるなー。生薬になってるやつを買うのは高いからな。薬屋に持って行ったらいくらになるかなぁ。さぞかし高く売れるんだろうなぁ」
「てめえ！　騙しやがったな！」
がたっと音を立てて白狼が立ち上がる。しかし大柄な若店主は驚いた風もなく冗談冗談と片手を振った。
「飯屋界隈じゃよく出回ってる品物だし、どこで売っても値段はたいして変わらねえよ。でもちょうどうちの在庫を切らしちまってたから助かったよ。早速使わせてもらうさ。じゃな」
「あ、おいこら、待て！」

揶揄われたと気づいた白狼だが、人目がある店内であまり騒ぎを大きくして客達に顔を覚えられるわけにもいかない。湯気の向こうに上機嫌で去っていく後ろ姿を恨めしい気分で眺めるしかなく、乱暴に椅子に座り直した。

腹立ちを誤魔化すように匙を粥に突っ込み、音を立てて啜る。ほのかに貝の出汁が利いた塩味がじわりと腹に染みた。現金なもので腹が温まると苛立ちもすうっと消えていく。確かにもう一品追加してもいいかもしれない。

そして店主が言った八角の効能とやらを反芻する。八角は袖の中の財布にもうひと包みある。生薬として使われるのであれば残りはどこかの薬屋にでも売ったほうが良さそうだ。

乳の出が良くなるというのが本当ならば――。ふと白狼の脳裏を一人の女の顔が掠めた。故郷にいるはずの姉の姿だ。

背が高く、日に焼けた肌に目だけがぎょろりと大きく目立つ女だった。最後に見たのは薄汚れた髪を一つに括り、泥に汚れた手指で菜を洗う姿だ。

もう故郷には何年も帰っていない。姉は、白狼より四つほど歳が上なのできっとどこかに嫁に出されているだろうが、子を産んでいるかも生きているかどうかも分から

ない。それなのに姉にこの八角を送ろうかと考えるなど、今日は仕事も中途半端な結果だし、何か調子が悪いのかもしれない。

「……やめやめ。今日はもう店じまいだ」

小さく呟いて、白狼はとりあえず鶏粥を食うことに専念したのだった。

調子が悪い時は何もしないに限る。

その後は本当に他の仕事をする気にもならず、かといって小間物屋や薬屋に出向くこともせず、白狼は街外れのボロ宿で昼寝をして過ごした。

宿とは名ばかりの小屋で、大部屋に筵を敷いて雑魚寝をするようなところだが、ここの素泊まりなら一泊銅銭二枚ほどで済む。節約を考えたわけではなかったものの、おかげで少し懐の余裕ができた。

日が暮れると、白狼はまた街へ繰り出し定食屋に向かった。美味い鶏粥をもう一度タカりに行こうというのはちょっとした言い訳で、本音は若店主が八角をどんな料理に使うのか興味が湧いたからだ。

美味いものになるのなら、薬屋と値段の交渉をするのも面倒だ。残りも若店主に

売っちまおう。

そう思いながら店に着いた白狼は人だかりのできている店先の暖簾をくぐった。

「毎度ぉ……!?」

店に足を踏み入れた白狼は、店内の様子に息を飲んだ。夕餉の時間で繁盛していると思った店内は、修羅場の真っ最中のように大騒ぎになっていたのだ。

昼間は活気に満ちていた場所が、今は食器が床に散乱して足の踏み場もない。その中で、卓について食事をしていただろう客が何人も泡を吹いて倒れている。床に倒れ込んで痙攣している者もいれば、すでに白目を剥いている者もいた。

前掛けや着物が吐瀉物まみれになった女給は悲鳴を上げっぱなしで、医師と薬師を呼べと若衆同士ががなり散らす。訳もわからず連れが倒れたと客の怒声がそれに上乗せされ、店の中はもはや収拾がつかない状態だった。

「な、んだ……これ、どういう……」

あまりのことに暖簾を避けたままの姿勢で立ち尽くしている白狼を押し除けるように、街の警吏が店内に駆け込んできた。

はっとして奥の厨房に目をやると、魂が抜けたかのように呆然とした若店主が警吏

に羽交い締めにされ縄で括られている。

見たことがないような惨状に若店主自身も何が起こっているのか理解が追いつかないのだろう。虚な表情で視線を彷徨わせていた彼は、後ろ手に縛られながらゆっくりと首を回した。

ぱちりと音がするかのように彼と白狼の視線が合ったその瞬間、若店主が恐ろしい形相で口を開きかける。白狼の全身に総毛だつような緊張が走った。

これはやばい。何かわからないけれど、やばい。

「……ちっ！」

野生の勘か、一瞬で身の危険を察知した白狼はさっと踵を返した。あとは振り向かずに店先にたむろする野次馬の中に紛れ込む。

人より小さな身体はこういうときに便利だった。暗めの色あいの胡服も、夕暮れ時に薄暗がりの路地に入り込んでしまえば良い目眩しになる。

しかし全身に立った鳥肌は落ち着くことがない。家出をして四年ほど経つがそれまでの経験で得た全てが、猛烈な勢いで白狼に警戒を告げていた。

この街を拠点にするのは潮時だ。明日の早朝には街を出よう。

白狼は全速力で場末のボロ宿に戻り、あてがわれた筵(むしろ)を頭から引っ被って目を閉じたのだった。

そしてあくる朝のこと。

夜中に警吏が踏み込んでくるかと浅い眠りに終始していた白狼は、重たい瞼をこすりながら宿を後にした。

暗いうちに出立することも考えたが、移動するにも路銀がいる。隣町程度であればまだしも、ちょっと遠くの街に移動しようと思えばその金額も馬鹿にならなかった。

いくらか蓄えがないわけではないが多いほうが安心だ、と白狼は今日の商売相手を探すべく街へ繰り出した。

しかし昨夜の若店主の形相を思い出すと、なんとなく街中の大通りをうろつく気分にはなれない。仕方なく普段は素通りする古い茶屋に入り、窓際の席から通りを物色することにした。

茶屋は年寄り夫婦が営(いとな)んでいるらしく、白狼が入るとすぐに婆の方が注文を取りに近寄ってくる。一見すると子どものような体格の白狼に婆は訝しげな表情を浮かべ

たが、饅頭と茶を頼んで銅銭を投げると何も言わずに店の奥へと消えた。

卓に着いた白狼はぼうっと窓の外へと視線を放った。道ゆく人を眺めるがしかしどうにも気分が乗らない。自然と思考は昨夜の騒動へと引っ張られる。

あれは一体なんだったのだろう。白狼と目が合ったときに若店主は何を言おうとしたのだろう。危険と感じてあの場を離れたが、一晩経ってみて街に警吏が増えている様子もない。

単なる食あたりだったのかもしれない。若店主が調理中に何か間違って腐ったものでも使ったのかもしれない。

白狼はなるべく楽観的に考えようとしてみたが、喉に魚の小骨でも引っかかったかのような違和感が拭えなかった。

泡を吹いて倒れる客が続出するほどの食中毒をだしたとすると、定食屋はもう営業ができないかもしれない。若店主には妻と赤子がいるはずで、夫が捕縛されて罰せられたとなれば妻子はどうなることだろうか。赤子が息子なのか娘なのかは知らないが、残された妻が女ひとりで今後まっとうに育てられるかどうか。

あまりその先のことは考えたくない。

「鶏粥は気に入ってたんだけどなぁ……」

理由はどうあれ、捕縛された若店主が無罪放免で戻ってきたとしても、白狼はもう二度とあの店に行くつもりはなかった。危うい匂いのするところには近づかない。盗みを生業にしている白狼が心に誓っていることの一つである。

しばらく待つと婆が無言で現れ、白狼の目の前に湯呑みと饅頭の皿を置いた。去り際に極々小さな声で餓鬼のくせにと吐き捨てられる。聞こえよがしに舌打ちをしてやると、婆はそそくさと店の奥へと戻って行った。

体の大きさや顔つきなどで侮られることはもう慣れっこだったし、それを利用していたとて、できればもう少し大きく育ちたかったというのが本音である。せめてそこら辺を歩く農夫やおかみさんくらいの背丈があれば、今とは異なる生き方もできたかもしれない。

同世代の少女どころか数えで十三、四の子どもより小柄な身長を今更ながら恨みつつ、白狼は湯呑みの茶を啜った。

「しかし、今日はめぼしい客がいねえなぁ……」

一人零す白狼だったがそれは当たり前のことで、ここは朝市のようにごった返す通

りに面した店ではない。窓の外を歩いている人の流れは少なく地元の人間ばかりで、これではいい商売相手を見つけるのは困難であった。

やはり大通りで探したほうが実入りがいい。仕方ねえ、と白狼が場所を変えるために立ち上がった時だ。

茶屋の前の通りを歩く二人組が目に留まった。

一人は壮年の男。体格が良く着ている者も地味な色合いながら上等な生地の故服である。のしのしと大股で歩いているようで若干背後を気にしているよう、という不思議な歩き方だった。

もう一人は、その後ろを歩く少年だ。壮年の男の子どもか、奉公人の小僧といったところか。長く伸びた髪を首の後ろで一束にまとめ、粗末な麻の服を着ている。

しかしあれは偽装だ、と白狼の直感が告げていた。

理由はその歩き方である。

するすると流れるように足をさばき、歩いているというのに頭の高さがほとんど変わらない。そんな歩き方なぞそこいらの商人や町人にできる技ではない。ましてその奉公人や子どもが習得するなどありえない。熟練の軽業師か、それとも。

――相当身分の高いお貴族様のお忍びか。
そう考えると壮年の男が背後を気にしながら歩いているのにも合点がいった。
男は護衛、少年は偉い貴族のお坊ちゃんとアタリを付ける。
大金の匂いに白狼の唇の端がつり上がった。少年が坊ちゃんなら、きっと前を歩く大男が財布を持っているだろう。随分と大柄ではあるが、きっとその分動きは鈍い。小回りが利くこちらが俊敏さで負けるはずはないと踏んだ。
しかもだ。二人組というのがいい。
人間、一人のときはそれなりに警戒心が高くなり、周りへの注意も怠らないものだが、二人や三人となると油断する。対するこちらは小僧と見紛われる程度の体躯である。しかも街中に屯する薄汚い孤児とは違い、身なりもそれなりに整えて疑われにくくしてある。
人混みに簡単に紛れられる大通りに出るならこっちのものだ。
そこまで考え、今日の商売相手をこの二人に決めた白狼は、機会を窺うためこっそりと後を付けることにした。

しかしだ。
結果は大惨敗だったのである。
人の数が一気に増える大通りに入り、いつものようにすれ違いざまによろけたふりをして壮年の男の懐から財布を抜いたところまでは良かった。ただその瞬間、後ろを歩いていた少年に財布を握った手を捻り上げられてしまったのだ。
「何をしている」
「……ちっ！」
捻り上げられた手首を背に回される直前、白狼は素早く身を翻して腕を振り払った。その拍子に握った財布を落としてしまったけれど、もうこうなったら仕方がない。衆目が集まりきる前に後ろを振り返ることもせず、白狼は即座に人の波に紛れ込んだ。
走って逃げる途中で何人かぶつかってしまった相手もいたが、さすがに今は財布を抜いている余裕はない。息継ぎもままならぬまま大通りを走り抜け、細い裏路地を数本抜ける。
足の速さには自信があったし、あんな大柄な男を撒くことなど容易いことだと「油

断」した。見た目など何も当てにならないということを、白狼自身がすっかり忘れていたのである。

ぐるりと路地裏を回り切った白狼は、街外れの空き家の塀に隠れながら膝に手を付いた。土地勘があって助かったと細い息を吐く。

しかし、安心したのは間違いだったとすぐに気づいた。頭上に大きな影が被さったと思った途端に、白狼の体は宙に吊り上げられてしまったのだ。

ぐつっと喉に襟が食い込み、自分が襟首を掴まれ持ち上げられていると知る。無我夢中で手足をばたつかせたが、それらは全て空を切った。

「大人しくしろ。暴れればそれだけ苦しくなるぞ」

芯が入った襟に気道を潰され、息が詰まり朦朧(もうろう)とし始めた白狼の耳に都言葉が響く。凛とした少年の声だった。ちくしょう、と声にならない声で呟いた白狼は、手足から力を抜きだらりと吊られるままになる。

経験上、こういったときは抵抗せずにいたほうが痛い目を見ずに済むからだ。

すると不意に首の締まりが解けて呼吸が楽になった。と思った瞬間、白狼の体は地面に落下した。

したたかに腰と尻を打ち、白狼は悶絶しながらその場に蹲(うずくま)る。あまりの痛さにじわりと目の周りが熱くなったが、相手はそんなことなどお構いなしに白狼の髪を掴んで顔を上げさせた。

「おい小僧。貴様、この財布はどうした」

「っつ……」

「答えよ」

「ってえ、よ……財布って、なんのこと……」

「この財布だ、貴様が持つにはいかにも不相応な代物だぞ」

てめえの財布はスリ損なったよ、と憎まれ口の一つでも叩いてやろうかと思って目を開ければ、突き出されていたのは昨日どこかの男から抜き取った色鮮やかな財布だった。

いつの間に落としたのだろう。暴れていた最中か、ツイてない。白狼は頭皮の痛みに顔を顰(しか)めながら自嘲する。

そこへ少年の声が再び割り込んだ。

「周、そう強く掴んでいては思うように話せまい。まだ子どもだ。手加減してやれ」

「しかし」
「よい。おい子ども。お前はどうしてこの財布を持っていた？」
やはり少年は大男の主人であるらしい。片膝をついて白狼の顔を覗き込みながら、昨日の財布を突きつけてくる。
しかしどうやら少年は自分のことを棚に上げ、白狼を随分と幼いと思っているらしかった。
普段なら相手の思い込みを利用するのだが、今日は何故か苛々する。答える気も失せて黙っていると、眼前に少年の顔が迫った。
つるりとした白い肌やうっすらと桃色に染まった唇がよく見える。左目の下にぽつんと置かれた小さな涙黒子（なみだぼくろ）が目元の透明感を引き立てているようだった。シミ一つない絹のような艶のある肌に、白狼のなかでざわりとした黒い感情がせり上がる。
「……昨日、拾ったんだよ」
けっ、と向かい合う白い肌に向かって唾を吐き、無駄とは思いつつ言ってみる。予想通り嘘を吐くなと一蹴すると、少年は手に持った財布を開き、その中を検め始めた。
「この財布に使われている生地と糸は遥か遠くにある東国からの献上品だ。おいそれ

とこのような鄙（ひな）びた地方の者が拾うことなどあるはずがないものだぞ」
「知らねえよ、拾ったんだ」
「正直に言え。さもなくば……」
焦れた大男が凄んだ。視界の端にちらっと金属の気配が掠（かす）める。太刀だ。刃物で脅されたらさすがの白狼も観念するしかなかった。
ちっと舌打ちをし、白狼は思い切って顔を上げた。もはや開き直って隙を見計らうしか逃げる手はない。
「昨日、ちょっと拝借したんだよ。朝市に来てた金持ち風のおっさんから」
「拝借？」
わざとらしく首を傾げた少年を白狼は睨みつけた。
「抜き取ったってことだよ、分かってんだろ」
「なるほど、盗人か。で、中身はどうした。銅銭しかないが」
「ほとんど手を付けてねえよ。もともとその銅銭十五枚しか入ってなかったんだ。金持ち風だからと思ったのに騙されたぜ」
「本当に銅銭しか入ってなかったのか？」

「あ？」

問いかけの意図を掴みかねた白狼の目の前に、少年が薄紙の包みをつまんで見せた。ゆっくりと白い指先が薄い紙をめくると、そこに入っていたのはあの棘（とげ）のついた草の実である。

ただの香辛料、五個で銅銭十枚程度という特段高価なものではないはず。そう思って白狼が見上げていた少年の目は、草の実を見た途端にすうっと細められた。

「これは……八角、いやシキミ……？」

呟くような少年の声に、大男がぎょっとしたように身じろぎをした。二人は一瞬目を見合わせ、そして少年の手の上にある草の実に視線を落とす。

「お待ちください、そんなはずは」

「待て。普通に考えれば可能性は低い。しかし逆にこれを……」

眉を顰（ひそ）めていた少年はすぐさま草の実から白狼へと顔を向けた。その目に宿っていたのは殺気だ。それまでとは異なる強い迫力に白狼は射竦められる。つい先程、子どもだからと大男を宥めていた時とは様子が異なっていた。

殺される、と白狼の背に冷たいものが走る。

「この財布に銅銭しか入っていなかったということは、中に入っていたこれはお前の持ち物か。街で売り歩いてでもいたのか？」

底冷えするような少年の声に、白狼は激しく首をふった。

「ち、違う！　最初からその財布に入ってたんだ！」

「お前、先ほどこの財布には銅銭十五枚しか入っていなかったといったではないか」

「本当だよ！　いや、草の実だから銭に数えてなかっただけで！」

「それはまことか？　本当にこの財布に最初から入っていたものか？」

「本当だってば！　ご、塵（じん）かと思って捨てようとしたんだけど、八角とかいう香辛料で生薬（しょうやく）だって昨日聞いて！　で、売り払うかどうしようかって考えてたんだ！　中に入ってんの忘れてただけだって！」

じいっと白狼を見つめる少年の目は深い沼のように黒く、すべてを見透かされるような気さえした。

普段であれば必死な弁明は恰好が悪くて大嫌いだったが、命の危険を感じた今、そんなことは言っていられない。思いつくまま言い訳をした白狼に、少年は大きくため息を吐いて分かったと答えた。

「まあ、もの知らずな子どもの言うことだ。信じよう。ただな、これは生薬（しょうやく）の八角ではない。毒の実だ」
「……え？」
「八角によく似ている形をしているが、東方の島でよく採れる実でシキミという」
「し、きみ……？」
「種や皮を食したり、煎じ汁を飲んだりすれば一刻もしないうちに吐いたり、失神したりするうえ、量を摂れば胸が詰まって息が止まる。以前、八角と間違って使われ大勢死に、国内での取り扱いは禁止されている品だ。売買に関わっていれば即逮捕となる」
大真面目な顔でそう説明され、白狼は息を飲んだ。
「俺、昨日定食屋に売っちまった……」
なんだと、と白狼を取り囲んだ二人は目を剥いた。その瞬間、少年から発せられていた殺気が霧散する。しかし白狼にとってはそれどころではない事態だ。心臓が早鐘のように激しく打ち鳴らされた。
「どういうことだ？」

「あ……いや、そんなこと知らなくて……八角だから買い取るっていうから、昨日の昼に売っちまって……」
少年に詰め寄られてしどろもどろになる白狼の脳裏に、昨夜の若店主の鬼のような形相が浮かんだ。
昨夜、若店主は白狼を見つけて言いかけた。それはあいつの持ってた八角を使ったんだ、という言葉だったのだろう。自分の料理に自信があった若店主が、客が倒れた原因を考えたとき思いつくのは「いつもと違うものを使った」ことに違いない。だからあんなに恐ろしい形相をしていたのだ。
手を震わせる白狼を見てから、少年はちらりと大男に視線をやった。
「客が大勢倒れて騒ぎになっていたと聞いたが、それはこいつのせいか、なるほど。――それは困ったな、周。ああ、困った事件だ」
「は、はい。ええっと、聞けば死者も出たとか、出なかったとか……。いやぁ、うむ、これは大事件ですな」
「となると、こやつは毒を売って人を殺した罪人となるな」
「そうなりますな。警吏か役人に突き出しますか」

少年と大男の二人は合点がいった風に頷きあう。
「ま、待て、そんなの知らなかったんだ！」
慌てて逃げようとした白狼を、大男の方が再び襟首をつかんで持ち上げた。放せっと手足を振り回すが体格差には勝てない。またもや白狼はぶらりと吊り上げられた形になった。
しかし再び白狼に助け舟を出したのは、少年だった。
「まあ待て、周。私に一つ考えがある」
片手で大男を制した少年は、吊り上げられた白狼の目をじっと見つめた。
「ここでお前を突き出しても、定食屋の事件の犯人として裁かれるだけだ。それではシキミを売りさばいている奴には繋がらない。しかしそれではこちらが困る。なにせ、そいつは離宮の姫に毒を盛ろうとした犯人かもしれないからだ」
「毒を、盛る……？　離宮の姫？」
混乱する白狼に少年は唇を歪めた。
「そうだ。お前、この河西の街にある離宮に皇帝の姫君が避暑に来ている話は知っているか？」

「え……、あ、ああ、噂には……」
そう答えたものの、いきなり何の話だろう。意図がつかめぬまま白狼は語尾を濁すが、それに構わず目の前の少年は続けた。
「我々は姫に随伴し帝都から来た者だ。昨晩、毒見の女官が一人死んだ。症状は嘔吐、失神、呼吸の停止。なんの毒か迷ったが、シキミが出回っているならその可能性が高い。このシキミの実が入っていた財布の持ち主は宮に出入りできる程度の身分と見た。犯人に近しい奴かもしれない」
「銀月様……そのような、いえ、そこまでお話しになっても宜しいのですか」
大男がわずかに狼狽えた。しかし少年はにやりと笑って白狼の顔に財布を突きつける。
「この財布とシキミを持っていた相手を知っているのはお前だけ。私と一緒に来ないか？　万が一そいつを見かけたら教えろ。罪に問われたくなくばな」
交換条件というわけだ。この状況、提案の形を取ってはいるものの白狼に選択の余地がないのは明らかである。断ったら警吏の詰所に突き出される。良くて拘留か苦役、悪ければ女官毒殺の容疑で死刑なんてことになるかもしれない。

立ち読みサンプル
はここまで

だから早く街から出たかったのに、というのは既に後の祭りである。

「いう事を聞けば今回の件は水に流し、礼金も弾んでやる。ここから遠い街へ逃げたいというなら手配してやってもいい」

「……分かったよ、やるよ」

だめ押しのような少年の提案を白狼は受けざるを得なかった。定食屋の件が白狼のせいなのだとすれば、河西からはうんと遠いところに逃げたい。

了承したところで大男は吊り上げた白狼を下ろしたものの、警戒は解いていないのだろう。目の端には抜刀したままの剣先がちらちらと見える。もう逃げない、という意味で白狼は両手を上げてみせた。

少年は大男に軽く頷く。

「雇用の手続きは任せる。適当に理由をつけろ」

「はっ」

壮年の男は白狼に剣を突きつけながら少年に頭を下げた。この二人がどういった立場の人間か知らないが、お姫様についてきたということは高位の貴族なのだろうか。こいつらに目を付けた時点でどうやら自分は相当なへまをやったらしい。

「では行こう。お前の名は？」

「……白狼」

「御大層な名だな。まあいい、ついて来い、白狼」

偉そうに、と思うものの逆らう訳にはいかない。白狼は大きく肩を落としながらため息を吐いて頷くしかなかった。

★

生まれて初めて入った貴族の家はとんでもなく広かった。いや、並の貴族の家であればもっとこぢんまりとしているのかもしれない。半端な貴族より金を持っている大店（おおだな）の主人の家の方が広いことだってよくある話だ。

しかしここ――離宮は、それとは明らかに別格だった。

朝市が開催される河西の大通りの突き当たりに建つ離宮は、見上げるほど高い塀でぐるりと囲まれていた。誇張表現ではなく白狼の背丈の三倍はあったろう。青銅色をした正門には吉祥を表す紋様が刻まれ、警備の兵が五人がかりで開閉していた。